

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

章炳麟と張之洞—交錯する清末の国粹主義—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陸, 胤 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2505

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



章炳麟と張之洞

—交錯する清末の国粹主義—

陸 胤 (城山 拓也 訳)

1. はじめに

宣統二年 (1910) 正月⁽¹⁾、章炳麟¹は『国粹学報』において「王鶴鳴への書信 (与王鶴鳴書)」を發表し、「中国の学問は、下から導けばますます栄えるが、上から広めれば衰退する (中国學術, 自下倡之即益善, 自上建之即日衰)」という見解を示した。この言葉は王からの来信の文面にあった「新式の学堂は劣ってはいるが、科挙よりもまだよい方だ。科挙を廃し、学校を設立すれば、学問は日に日に進歩するだろう (学校雖劣猶愈於科挙, 科挙廢, 学校興, 學術当日進)」という主張に対するもので、朝廷の設立した新しい學術機関が利益や禄高のための方途にすぎず、学問に期待できるものではないことを指摘している。清朝官吏が新教育を主導すれば、富裕層の子弟が学問を占有してしまい、科挙時代よりも教育が不公平になるということである。

先行研究はすでに、章炳麟のこの書信²に見える「学は民間にあり (学在民間)」の立場について注目してきた。本稿でさらに検討したいのは、こうした在野の学問的立場と、20 世紀初めの清朝において官がトップダウンで進めた近代教育建設との間に、関係があったのか否かという点である。清末の学制制定者および学堂建設の主導者として、張之洞ら²「上から広め」た者たちが、近代中国における知の転換に果たした役割は無視できない。彼らと章炳麟ら「下から導」く者との交流を考察することは、彼らにいかなる影響関係があったのかを描き出し、もう一つの「国粹主義」の可能性を探ることとなるだろう。

2. 「数日の旧誼 (一二日之旧遊)」

章炳麟と張之洞との直接的な交流は、光緒二十四年 (1898) の春頃に始まる。当時、張之洞陣営では、康有為・梁啓超一派の過激な論説に対抗するた

1 『国粹学報』第 63 期、宣統二年 (1910) 正月二十日。

2 陳平原『中国現代學術之建立——以章太炎、胡適之為中心』(北京大学出版社、1998 年) 第二章「官学与私学」、70-115 頁参照。

め、国内外の人材を招聘して『正学報』の創刊を目指していた。章炳麟も武昌に招かれたが、政治的立場の相違から梁鼎芬らの排斥に遭ってしまう。章炳麟の晩年の自定年譜によると、「はじめ、私は『春秋左氏伝』と『周礼』の義を重視しており、今文を主張する者とは意見が合わなかった。清の湖広総督〈湖南、湖北両省を統括する長官〉で南皮出身の張之洞も今文を重視する公羊学派を好まなかった。誰かが張之洞に私のことを告げたので、之洞は私に手紙を書かせて反駁させた（初、余持『春秋左氏』及『周官』義，与言今文者不相会。清湖広総督南皮張之洞亦不熹公羊家，有以余告者，之洞属余為書駁難）」。すなわち湖北方面から招聘された背景には、今文・古文の論争という経学上の事情があったということになる。しかし注意しておきたいのは、これが何年も経った後に書いた追記だということである。すなわち「後見の明」が入り込む余地があるわけで、章炳麟が当時古文派としての立場にあったことは、ここに書かれているほど鮮明だったとは限らない。十数年後、章炳麟は『自述學術次第』を記すにあたって、次のように述べている。

私は昔、南皮の張孝達（張之洞）の所にいた。彼はかつて、「国学⁽²⁾は精妙であり、三百年の發明はすでに完成を見ている。後進はただその功績を継承すればよく、さらに深く探究する必要はない」と言ったことがある。張はもともと分かりやすさを好み、学問を深く探究する時間もなかった。また当時、奇怪な言説が流行していたこともあり、深く探究することで異常な方向に行くことを恐れ、このように語ったのである。その時、私は「經典には古文と今文があって、昔から道が異なる。近代の諸賢は、はじめは分かれていなかったが、後に今文を専門とする者が現れた。しかし古文を専門とする者はいない。これも現状の欠点である」と答えた。（余昔在南皮張孝達所，張嘗言：“国学淵微，三百年發明已備，後生但當蒙業，不須更事高深。”張本好疏通，不暇精理，又見是時怪說流行，惧求深適以致妄，故有是語。時即答曰：經有古、今文，自昔異路，近代諸賢，始即不別，繼有專治今文者作，而古文未有專業，此亦其缺陷也。”）

3 章炳麟の「正学報縁起」は『正学報』の発起人として梁鼎芬、王仁俊、陳衍、朱克柔、章炳麟の五人を列挙しているが、張之洞の名義による「正学報叙例」の記述とかなりの異同がある。湯志鈞編『章太炎政論選集』（中華書局、1977）上冊、58-63頁。

4 『太炎先生自定年譜』（章氏国学講習会、1929）光緒二十四年の項、第6-7頁参照。また錢玄同が顧廷龍に送った書信でも、章炳麟にかつて『春秋左伝読』の書があることに触れ、「戊戌の年、張香濤（張之洞）が章炳麟先生を湖広総督の幕下に招いたが、それは張氏がかつてこの書を読んだことがあるからである。張氏は『公羊』を嫌い、『左氏』を好んでいたため、先生のこの書を好んで、康長素（康有為）の『偽経考』等を嫌ったのである（戊戌年張香濤延先師至鄂督幕中，即因張氏曾讀此書也。張氏痛恨『公羊』而嗜『左氏』，故熹先師此書而惡康長素之『偽経考』等）」と述べる。錢玄同「与顧起潜書」『制言』第50期、1939年3月参照。

5 章太炎『自述學術次第』、附載虞雲国校点『葑漢三言』（遼寧教育出版社、2000）、176頁。

張之洞はかつて北京にて金石文の考証学者グループに属しており、翁同龢・潘祖蔭・呉大澂・王懿榮といった学者らと交流していた。また彼は同治年間(1862～1874)、浙江の郷試を監督する立場にあり、その任期には、袁昶・許景澄・孫詒讓・譚廷献らといった考証学者が輩出している。さらに自らも蘇州に赴き、章炳麟の師の俞樾を訪ね、「注意深く教えを拝聴し、深く敬服した(備聆教益，佩仰良深)」と述べている。しかし張之洞本人の学問的態度は、「清流」〈清末における知識人グループ〉に参加して政事を論じ、続いて総督や巡撫といった地方官を経験してからというもの、「分かりやすさ(疏通)」の方へ転ずる傾向が強まっていく。自ら専門家として学問を究めるよりは、むしろ学術集団を組織する役割を果たしていったと言える。章炳麟と彼は、公羊学に反対する立場を共有していたものの、新旧両代の間の溝のため、さらにはそれぞれの立場の制約を受けたために、学問の方向性が分岐したのである。

光緒二十四年(1898)、武昌において張之洞が章炳麟に『勸学篇』を見せると、章炳麟は上篇の「清朝廷に忠義を尽くす(効忠清室)」などの言葉をよしとせず、遠回しに「下篇は詳細で真実がある(下篇為翔実矣)」と応えた。しかし章炳麟は光緒二十六年(1900)の二月、張之洞がかつて四川の学童向けに説諭した『輜軒語』を再読したところ、極めて高く評価し、その書の末尾に手書きで記している。「張氏のこの書における議論は、道理に通じ、また言辞も鮮やかである。中には古臭く、浅はかな話が混じっているものの、『勸学篇』と比べれば、それはまさに美女の毛嬙と醜女の嫫母を比べるようなものである。張氏は五百金でこの書を繆荃孫から買ったらしいが、本当だろうかと言う者もいた。私が昔この本を読んだとき、張氏は視野が狭いにもかかわらず、先哲の言葉を用いており、礼法を逸脱していないことをひそかに怪しんでいたが、金で買ったという話を聞き及んで、はたと納得したものである(張氏是書所述途徑，通達安雅，其間有迂陋語孱廁其間，然較之『勸学篇』，則若嬙之与嫫矣。或曰：張氏以五百金購之繆荃孫氏，然乎否乎？余曩者瀏覽是編，私怪以張氏之弁淺而能承用先哲故言，率履不越，及聞購刊之說，而後豁然理解也)」。ここで章炳麟が重視しているのは、『輜軒語』の中の乾嘉考証学の常識を普及させている点である。一方、科挙試験の実用知識を教える「古臭く、浅はかな話(迂陋語)」については、張之洞本人が「勝手に脚色している(妄自点窜)」と考えていた。ここからうかがえるのは、民族意識のほかに、考証学の立場を堅

6 訪問は同治六年(1867)のことであった。張之洞「与俞階青(陸雲)」、河北版『張之洞全集』第12冊、書札八、10346頁参照。ただしこの書札は俞樾逝去後の悔やみ状であり、「深く敬服した(佩仰良深)」云々にさほど大きな意味はなかったことを踏まえる必要があるだろう。

7 李福眠「章太炎批跋張之洞『輜軒語』」、『疏林陳葉』(山東画報出版社、2003)、62頁。

守できるか否かということも、章炳麟が張之洞の学術功績を評価する重要な基準となっていることである。

光緒三十二年（1906）、東京に亡命し、「光復を提唱したが、学問をやめたことではない（提奨光復、未嘗廢学）」章炳麟は、張之洞と連絡を取り合っていた。双方が議論したのは、すでに経学や考証学にとどまっていなかった（下線は引用者による）。

日本で雑誌を興してから、私は親戚旧友、すべてに連絡を取っていません。後に同盟会が徐々に腐敗するのを見て、憤って僧となり、インドに經典を求め、ベトナム、朝鮮の学生と「亜洲和親会」を結成しようとした。インドの革命党は才気があり、志も高いと聞き、食料を携えて彼らのもとへ向かい、仏法を修めようとしたわけです。そのときは借りた金がすべてなくなっていました。南皮の張孝達だけは数日の旧誼があり、後に東京において、文学、教育の諸事について手紙を送って建議したことがあります。張は革命党にもともと悪い印象を持っていないので、やむなく金を借りようとしたのです。手紙を長崎領事の下某に託したのですが、その下とは張之洞の娘婿です。下は帰国後、張之洞に手紙を渡しかねて、ひそかに端方に話をしました。すると端方が私のことを奇貨と見て、逆に下をこちらによこしたのです。（僕自抵東辦報，親戚故旧，音問俱絶。後見同盟会漸趨腐敗，憤欲為僧，以求梵文於印度，又与安南、朝鮮諸学生立亜洲和親会，聞印度革命党才高志堅，欲裹糧以從之，得所觀法。於時假貸俱絶，惟南皮張孝達有一二日之旧遊，後在東京，關於文学、教育諸事，亦嘗遺書獻替。張於革命党素無惡感，不得已告貸焉。其書囑長崎領事下某帶歸，下即【張】之婿也。下回国後，不敢請通，私以語端方，遂居為奇貨，反囑下来告。）⁸

光緒三十四年（1908）前後、劉師培^{りゅうしぱい}、何震夫婦^{かしん}は章炳麟と反目し、光緒三十三年九月の出来事を暴き立てている。それによると、章炳麟は「張之洞に手紙を渡し、旧交を温め、その国学に迎合している。手紙の末尾で、もし巨額の援助をすれば、政治問題にはもう口を出さず、『民報』の編集も謝辞すると言っている（上張之洞書与申旧誼，逢迎其国学，末言若助以巨金，則彼於政治問題，不復聞問，并謝辞『民報』編輯⁹）」とある。書信の中の「数日の旧誼（一二

8 「章太炎致浙江統一党部」、曾業英「章太炎与端方關係補証」（『近代史研究』1979年第1期）より引用。

9 「何震与吳稚暉書」（1908年4月21日）、楊天石「何震揭發章太炎——北美訪報録」『晚清史事』（中国人民大学出版社、2007年）、第351-352頁より引用。同年、劉師培は黄興に書信を出した時も、次のように述べている。「章炳麟はこの時、すでに革命をするという心づもりはなく、インドへ行って僧になろうとしていました。また、金がなかったので、政界でいろいろな人に取り入ろうとし、張之洞に手紙を書いて、卑しい言葉を数多く述べ立しました。その草稿が本の中にあつたのを、ふと私が見つけました。すると彼は自分を偽ろうとせず、士にはそれぞれ志があり、同盟会と一緒に事をなす場所ではなくなったといひます。仏門に入るのノ

日之旧遊)」とは、光緒二十四年の春に、章炳麟が武昌で『正学報』に参加したことを指している。しかしながら、学問的立場が似ているために、章炳麟は張之洞側にいまだ好感を抱いていたようで、『民報』上で「漢字統一会」への批判を書いたときには、「張之洞は、多少は小学（中国伝統の音韻、訓詁、文字の学）を理解しているのだろう（張之洞蓋略知小学者）」と指摘し、同時に次のように述べていた。「私は張之洞とは異なる立場にあるが、私怨や些末なことからはではない。彼の古学に対する知識を鑑みれば、当時の役人の中でも、また凡百の中でも傑出していると言えるだろう（余於張之洞戎夏異途，然故非有私怨小忿，念其窺知古学，於当今百執事間，亦傭中之佼也）¹⁰」。注意したいのは、章炳麟が東京にいるとき、張之洞のために「文学、教育の諸事について」献策していたと言及していたり、劉師培や何震も章炳麟が張之洞の「国学」に迎合していたと述べていたりしていることである。ここから推測できるのは、国学、文学、教育などの問題をめぐって、張之洞陣営と章炳麟ら国粹派学者との間で、かなりの交流があったということではないか。

3. 漢字統一会

光緒三十四年（1908）九月、軍機大臣で学部（清末の学部は日本の文部省にあたる）の管理も担当していた張之洞は、弟子で湖北提学使（提学使は地方の教育行政長官）の黄紹箕こうしゅうきに手紙を出し、日本の教育者、伊沢修二が設立した「漢字統一会」を挙げ、会長に推薦する意を伝えた。

日本の貴族院議員、伊沢修二氏と北京にて会談しました。この人は中国文学の素養が非常に高く、日本人が漢文を廃する説を訴えたため、「漢字統一会」を設立し、東アジア諸国の儒者と連携し、漢学を維持しようとしています。私は海外で有名であると思われ、この会の会長に推薦されてしまいました。私は年齢も高く、学問も浅はかで、務まるはずがありません。今は大事なポストにいますし、政務も忙しく、外国人と連絡して会を結成する時間はないのです。そこであなたを代わりに推薦いたしました。伊沢氏もあなたに敬意を表して、武漢に立ち

も、現在の急務とのことです。そこで私に次のような相談を持ち掛けました。今の長崎領事の卞緯昌は、張之洞の娘婿で、何震の親戚である。張への手紙を卞に持っていくよう言づけて、三万を無心してはどうかと。二万は彼の旅費として、一万は私の本の印刷代とするというのです（太炎当此之时，已無心革命，欲往印度為僧，又以無款之故，欲向官場運動，乃作函於張之洞，辞多猥鄙。乃其稿藏於書中，猝為僕見，彼亦不復自諱，宣言士各有志，同盟会不足与有為，而研習仏教，亦当今急務。且与僕相商：言今長崎領事卞緯昌，為張之婿，于何震為戚属，可将致張之函稿托卞轉致，向張索款三万：以二万助彼旅費，以一万歸僕為印書之資）。これは章炳麟が後に述べたことと、基本的に符合する。楊天石『『民報』的続刊及其争論』『中華文史論叢』1982年第2輯（総第22輯）より引用した。

10 【章】太炎「漢字統一会之荒陋」、『民報』第17号、「時評」欄、1907年10月25日。

寄って視察し、あなたのご高説を承りたいと述べていましたので、一言ここで紹介しておきます。お忙しい中ですが、会見の機会を設け、彼の願いを叶えていただけないでしょうか。（日本貴族院議員伊沢君修二、在京晤談。此君於中国文学根柢頗深，因日人有創廢漢文之說，特立漢字統一會，并擬聯東亞諸國儒者，維持漢學。謬以鄙人海外知名，公舉為該會會長。僕年老學荒，豈能勝此。且現居樞要，政務殷繁，亦無暇與外國人聯絡結會。當舉足下以代，伊沢君亦甚欽慕，據云，擬便道赴武漢考察，藉聆閎議，特為介紹一言，尚希撥冗接見，以副此君願言之雅。）

前年三月十九日（1907年5月1日）の東京の雑誌『太陽』の報道では、「漢字統一會」は金子堅太郎（1853-1942）、肝付兼行（1853-1922）ら数十人で発起し、光緒三十三年二月三十日（4月12日）東京華族會館にて總會を開催し、駐日公使、楊樞も会場に駆け付けたという。事務記録と会計の報告ののち、伊藤博文を総裁、金子堅太郎を日本部會長、伊沢修二を副會長とすることを決定し、「清國部」會長は張之洞、副會長は端方、嚴修、楊樞が担当した。「韓國部」會長は朴齊純（1858-1916）である。張之洞の言う「この會の會長に推薦されてしまいました（公舉為該會會長）」¹²というのは、つまり中国分会會長のことである。

張之洞の「漢字統一會」への関心は、光緒二十四年（1898）から同二十七年（1901）の間の「同文」説に対応しているように見える¹³。しかし彼の認識は、「漢學を維持」するという表面にのみとどまっていた。光緒三十三年（1907）九月、金子堅太郎は「漢字統一會解説に関する意見」という文章を発表し、「日清韓三ヶ國に於ける數千年の文明は、一に漢學の力に因る」と述べている。しかしながら、その議論の重点は、「漢字」を媒介として、日本が吸収した西洋の知識を輸出することにあつた。「日本は素より羅馬字に依りて歐米の文明を輸入し、能く之を咀嚼し、尚ほ之を消化して、其得たる結果をば漢文字を通じて之を朝鮮支那に輸出すべき一大責任を負担せる者也。世界國を建つるもの多しと雖も、又泰西文明の成果を蒐めたる歐米先進國ありと雖も、而し東西兩半球の文化を一國に萃めて之を混化融合し、其結果更に亞細亞大陸に対つて發揮擴充する好地位を占むる國は、日本を除いて他に適者なきことは歴然たる事實也¹⁴」。ここでは、日本は東西を融合するという優位を占め、アジアに新しい時代の機運を生み出す天命があると認識している。これはすなわち日清戦争後

11 張之洞「与黄仲韜」（光緒三十四年九月二十五日）、河北版『張之洞全集』第12册、書札八、10336-10337頁。

12 「漢字統一會」、『太陽』第13卷第6号、「清國時文」欄、1907年5月1日。

13 陸胤「從“同文”到“國文”——戊戌前後張之洞系統對日本經驗的迎拒」、『史林』2012年第6期、参照。

14 金子堅太郎「漢字統一會開設に関する意見」、『太陽』第13卷第14号、1907年11月1日。

の日本の論壇で隆盛していた「東西文明融合論」であり、実際にはアジア各国を差別し、それらの国々への覇権、拡張を目指そうとする意識があった¹⁵。しかし、日露戦争を身を以て経験したことで、張之洞ら中国の士大夫はすでに「人種同盟」の幻想を打ち捨てており、近代外交の中での国家利益について、より深い認識を備えていた。「漢字統一会」は日韓併合が行われようとする時に設立しており、ここで宣揚されている「同文同種」説は、瞬く間に歴史の皮肉と化す運命にあった。

「漢字統一会」は東アジア各国の間で漢字を制限し、表音文字を統一しようとしていた。会の実際の事務は、伊沢修二が主導していた。彼は有名な教育者であるだけでなく、近代日本における国語と音楽教育の先駆者でもあった。伊沢修二は光緒三十四年（1908）に出版した『同文新字典』において、常用漢字を六千字以内に制限し、日中韓三ヶ国の漢字の音を正確に表記すると謳った「新音字」の推進を提唱している。当時、日本にいた章炳麟は、「漢字統一会」が漢字を制限する真の意図について考察し、『民報』上の文章でこう反駁している。「日本と中国を、「同文」と名付けているが、その源流は全く異なる（日本与中国，名為‘同文’，其源流固絶異）。さらに、「張之洞は、多少は小学を知っているはずなのに、とぼけて入会するなど、どうしたことだ？（張之洞蓋略知小学者也，亦含胡与会，何哉？）¹⁷」と疑問を呈してもいる。実際には、張之洞は「漢字統一会」が成立した翌年に入会の知らせを受け取っており、具体的な活動には参加していなかったようではあるのだが。

注意しておきたいのは、章炳麟がこの文章の中で、自らを楊雄^{ようゆう}になぞらえる一方、張之洞を王莽^{おうもう}に仕え、小学^よを能くした張竦^{ちやうしやう}と比較していることである。「国文を用いることは、王朝の交代によって変化するものではない。（張之洞は）清朝廷に仕えてはいるが、この点については批判すべきではない。……鐘が宮中で鳴り響き、音が外に漏れ聞こえてくる〈『詩経』「小雅・白華」をふまえる〉のは、ちょうど外にいる楊子雲が宮中の伯松に期待するようなものではないか（国文之用，不以朝姓變易而殊，（張之洞）雖仕清廷，於此不宜抑挫。……鼓鐘在宮，声聞於外，亦猶楊子雲之望伯松坎？）¹⁸」章炳麟はここにおいて、

15 近代日本における「東西文明融合論」の様々な形態とその本質については、野村浩一「近代日本に於ける国民的使命観——その諸類型と特質」『近代日本の中国認識——アジアへの航跡』東京：研文出版、1981、15-18頁を参照されたい。

16 「同文新字典・凡例」（漢字統一会撰、伊沢修二監修『同文新字典』泰東同文局、1908）参照。

17 【章】太炎「漢字統一会之荒陋」、『民報』第17号、「時評」欄、1907年10月25日。

18 同前注。楊雄著『方言』について、王莽の寵臣、張竦は「太陽や月とともに掛けることができる、かけがえのない本（懸諸日月不刊之書）」と考えていた（応劭『風俗通義序』）。一方、章炳麟はこのとき『新方言』を編んでいたため、こうした比喻は、実際のところ張之洞への期待を表している。

学問は政治的立場によって阻まれるべきでない」と表明するのみならず、張之洞と同じく広義の「国文」概念で伝統学術の総体を表している。ただしそうした積極的なアピールは、張之洞からの即時の反応を受け取ることはできなかった。続いて章炳麟は端方と接触しようとするも、これも叶わなかった。数年後、章炳麟は翻って「禄を食む役人には期待できない。文科、経科の設立は、おそらくただ形だけのものだろう（肉食者不可望、文科、経科之設、恐只為具文）」と述べ、張之洞の主導する学制章程を批判している¹⁹。この発言は「学は民間にあり（学在民間）」という立場から出たものだが、張之洞、端方との交流の断絶と関係がないとは言えないだろう。

4. もう一つの「国粹主義」

光緒期最後の四年間に、民間と海外の「国粹主義」言説の後押しを受けて、清朝廷では中央から地方まで、官僚たちがこぞって「国粹を保存せよ（保存国粹）」と訴えはじめていた。光緒三十年（1904）六月、張之洞は黄紹箕に電報を打ち、新学堂の「経史漢文」の授業があまりにもお粗末で、このままでは儒学が衰退する心配があるとして、武昌に存古学堂を建て、「時局を救うことと、読書人の種を保つことが、矛盾せず並行できること（救時局、存書種兩義、并行不悖）」²⁰を願っている。三十一年（1905）科挙が廃止された。十月には、河南巡撫、陳夔竜が開封に「尊経学堂」を設立しようとし²¹、同時に山東巡撫、楊士驤もまた「国文学堂」設立の考えを示している²²。光緒三十二年（1906）以降、各省は競って「存古学堂」を設立し、一時の風潮となるほどであった。

このとき世に出た様々な「存古」設立の計画は、いずれも「学堂」という名称を採用していた。また、学部からの疑義を防ぐため、多くが「大学分科に倣う意思（倣大学分科之意）」²³を表明し、旧式の書院と一線を画している。光緒三十三年（1907）五月、湖広総督を辞めて後任に引き継ぐ際に、張之洞は「創

19 「通訊・章絳（太炎）來函」、『国学保存会報告』第三十九号、附『国粹学報』第59期卷末、宣統元年（1909）九月二十日。

20 張之洞「致瑞安黄仲弢学士」（光緒三十年六月十二日丑刻發）、苑書義・孫華峰主編『張之洞全集』（河北人民出版社、1998）第11冊、電牘九十、9175-9176頁。

21 陳夔竜「擬設尊経学堂及師範伝習所摺」（光緒三十一年十月初五日）、『庸庵尚書奏議』卷六、『近代中国史料叢刊』（文海出版社、1970、影印本）第507種、609-615頁。

22 光緒三十二年三月三十日に出版された『広益叢報』第103号に、「興建国文学堂」と題した報道記事がある。光緒三十三年八月廿九日同刊第148号には、「東撫楊中丞設国文学堂文」がある。楊士驤の設立した「国文学堂」は、宋恕の「粹化学堂」構想に啓発を受けており、張之洞の考え方と異なる。「上撫楊請奏創粹化学堂議」（光緒三十一年十月初九日）、『宋恕集』（中華書局、1993）、371-375頁、参照。

23 光緒三十二年以降の各省の存古学堂創設上奏の概況については、潘懋元・劉海峰編『中国近代教育史資料匯編・高等教育』（上海教育出版社、2007、増訂本）、229-266頁を参照されたい。

立存古学堂摺」を上奏し、存古学堂について次のように強調している。「学堂と同じであるとするのは、規則は厳しく、衣冠は画一であって、講義は講堂で行い、問答には白い漆で塗った木の板を用い、毎日兵練も兼ねる。出入りするにも礼儀正しく、日々の生活は時間通りに、課程の時間割も定まっています、食事や面会にもルールがある。みな今の文武の学堂と同じで、古い時代の書院でのしきたりとまったく異なる（与学堂同者，則規矩整肅，衣冠画一，講授皆在講堂，問答写於粉牌，毎日兼習兵操，出入有節，起居有時，課程鐘点有定，会食応客有章，皆与現辦文武各学堂無異，与旧日書院積習絶不相同²⁴）。存古学堂の課程は、経学（「説文爾雅学」を附す）、史学（「本朝掌故」を附す）、詞章（「金石学」「書法学」を附す）、博覧の四門に分かれ、このほかに「少し科学を学んで、普遍的な知識を身に付ける（略兼科学以開其普通知識）」、余力のある者はさらに「西洋の言語を補習し、将来の研究のための糧とする（加習洋文，為将来考究之資）」。²⁴少なくとも制度設計で言えば、存古学堂は近代的な教育モデル、学校規則、学科区分を試験的に採用することで、伝統的な経史・詞章の学問を再構築するものであった。

存古学堂の課程、時間割を制定するため、張之洞は「じっくりと熟慮し、何年も計画し、督同、提学司、それに各司道、それに各学堂の良師、通儒と数十回の相談を経て、やっと大まかに策定することができた（殫心竭慮，籌計経年，并督同提学司及各司道并各学堂良師通儒，往復商榷数十次，始克擬定大略²⁵）」という。注意したいのは、存古学堂に似た制度が、これ以前に湖北の新しい学校制度において、すでに体现されていた点である。光緒二十八年（1902）「籌定学堂規模次第興辦摺」で提示した「勤成学堂」がそれで、その狙いは年齢が高く、新学堂に入り辛い年長の書生を受け入れることにあった。「科目を分けず、年齢制限を分けず、定員人数を設けず、官が定期的に試験をする（不分科目，不立年限，不立額数，由官分期考課）」²⁶点で、旧来の書院制度を継承していた。後の湖北存古学堂の人材、および組織は、多くはここに由来している。存古学堂の構想は光緒三十一年（1905）前後に提出しており、科举制度の撤廃後、挙人、貢人、監生の生きる道を残し、反対者が古学を言い訳にするのを防ぐ意味合いがあった。その他、張之洞らは当時の新設学堂のレベルが低く、「初等小学の国文科教師（初等小学国文之師）」しか育てられず、書院を出た旧学の人材が絶えるのではないかと心配していた。したがって、存古学堂は

24 張之洞「創立存古学堂摺」、河北版『張之洞全集』第3冊、奏議六十八、1764頁。

25 同前注、1765頁。

26 張之洞「籌定学堂規模次第興辦摺」（光緒二十八年十月初一日）、河北版『張之洞全集』第2冊、奏議五十七、1494頁。

さらに、初等小学以上の新式学堂のために、「国文専門の教員」を育成するという現実的な役割をも担ったのである。²⁷

「創立存古学堂摺」は「保存国粹疏」と改題されて、単行本の形で世に出た。伝えられるところによると、「学堂の外でも、学があり、道理に明るい人はみな、この疏を手に入れて読むと、礼教がなければ世が乱れ、後代を遺さなければ国が亡ぶという危機感を覚えた（学堂以外、凡読書明理之人、得此疏而讀之、皆惕然於無礼之必敗、不殖之將落）」という。つまりその影響は「存古学堂」という学校制度の内側にとどまらなかったわけである。張之洞にとってこの摺の意図は「国粹を保存せよ」にあったが、その文頭では、外国での経験を引用して自らの論を立てている。まず「今日の世界中の学校では、みな国文を最も重んじている（今日環球万国学堂、皆最重国文一門）」と標榜し、続いて「国粹」が「東洋、西洋各国における強国の根幹である（東西洋各国強国之本原）」という。中国特有の「中体」と異なり、ここでいう「国粹」には普遍性が備わっているわけである。ややのちに曹元弼がこの摺の真の意図について解釈し、次のように論を展開したことがある。

今日の世界各国、政治制度、技術は日進月歩で、みな国粹を保存する意図があり、互いを参考としながら、みな本国の言語・文字を重視している。よってほかの国を訪れたことのある者も、新しいものを好み本来のものを忘れ、同族のものを捨てて異属のものに親しむという恐れはない。存古とは、昔から今に通じる常道であり、中国と西洋に共通する原理である。（今日環海各国、政事藝能、日新一日、皆有保存国粹之意、互相師法、而皆以本国語文為重。是以其人遊歷他国者、無喜新背本、棄同即異之患。蓋存古者、古今之常道、中西之通義。³⁰）

張之洞が体系的に「中体西用」を語るとき、多くは「旧学を体と為し、新学を用と為す（旧学為体、新学為用）」という表現を用いており、「設立存古学堂摺」でも「昔と今」を強調し、「中国と西洋」を対立させていない。「中国と西洋」それぞれに「新旧古今」があり、それぞれの国に「国粹」が備わっているとすれば、「体用」の内実は、おのずと中国、西洋の学術競争という意味合いを超えて、もっと根本的な意味を有することとなる。たしかに、張之洞、曹元

27 前掲「創立存古学堂摺」、1763 頁。

28 上海図書館古籍部に「蘇省臨頓路毛上珍排印」と記された木活字版の単行本が一冊所蔵されている。外の装幀では『南皮節相保存国粹疏』と題しており、本文は『張相国保存国粹疏』と改題されている。この『張相国保存国粹疏』の後ろには、曹元弼が「光緒三十三年（1907）七月既望」付で書いた「書張相国保存国粹疏後」の一文を附している。

29 曹元弼「書張相国保存国粹疏後」、前掲『南皮節相保存国粹疏』、第 10b 葉（巻ごとの葉数）。

30 同前注、第 5a 葉。

弼らが「国粹を保存せよ」と提唱するのは、清朝支配を維持するという意図もあるし、また古い学術資源を育てようとする現実的な需要もあり、海外の国粹論者との立場とまったく異なる。しかしながら、東西各国の学問にそれぞれ「体」の存在を認め、普遍的な意味において倫理、歴史、言語・文字といった「体」が、政治制度・技術などの「用」をコントロールしていることも明らかにしているのである。これは近代における「体用」概念の変遷の中でも、卓越した見解であると言わねばなるまい。曹元弼は、存古学堂を設立すれば経世済民が実現し、新学堂で「学んだ自然科学は、みな国や民を助けることとなり、悪いものを助けることにはならない（所学声光化電等，皆以济国济民，而不以济恶）」と述べている。ここでの議論では、もはや中国、西洋、新、旧にとどまらず、近代的な様相を備える経史の学と、「科学」との関係に踏み込んでい³¹る。

「清流」を背景に持つ学者は、多くが清末における各省の「存古学堂」の発起人であり、官の体制内で「国粹を保存せよ」論に呼応する重要な役割を担っていた。張之洞陣営の継承者は、沈曾植^{しんそうしよく}、陳衍^{ちんえん}、陳三立^{ちんさんりつ}、陳慶年^{ちんけいねん}、屠寄^{と き}、繆荃孫^{ら しんぎょく}などであるが、彼らは民国期に入っても学术界で活躍し、近代の学科体制における文学・歴史研究の発展に大きな影響を及ぼすこととなる。辛亥革命前夜、当時の京都帝国大学教授であった狩野直喜は、夏季講習会において「支那近世の国粹主義」という特別講演を行っている。近代日本における「支那学京都学派」の創始者として、狩野直喜は光緒二十八年（1902）前後、張之洞陣営を訪ね、鄭孝胥^{ていこうしよ}ら詩人たちと面識を得た³²。その講演で語られた「国粹主義」は、鄧実^{とうじつ}、黄節^{こうせつ}、章炳麟、劉師培ら国粹論者の主張を指すのではなく、清末の政府側における教育改革、法律改革などの保守的傾向を指し、張之洞をその代表的人物とするものだった。旧学の保存、改革という観点から見れば、張之洞ら学者グループの影響は、民国期以降の国学・国文教育にまで一貫して続いていた。清末最後の数年間において、張之洞・梁鼎芬・黄紹箕・曹元弼らが新名詞〈日本から受容した新しい漢語〉を拒絶し、儒教の経典を読む課程を制定し、存古学堂を設立した行為は、外から「国粹主義」と見なされるばかりか、章炳麟ら排滿傾向を備える国粹論者と相互作用を起していた側面すらあったのである。

31 同前注、第9a葉。

32 狩野直喜「海蔵楼詩を読む」、『支那学文藝』（弘文堂、1927、第411頁）

33 「支那近世の国粹主義」、『芸文』（京都）第2年第10号、第3年第1号、1911年10月（注：この文章が『支那学文藝』に所収されたとき、初出年月を1911年7月とする誤った注が附されている。おそらく「七」と「十」の形が似ているためであろう）、1912年1月。

5. 余論

張之洞は、光緒二十年（1894）から二十四（1898）までは康有為、梁啓超一派といった維新勢力を援助し、二十六年（1900）以降は海外の国粹思潮の影響を受けていた。しかしこれら新しい学問、思想は、張之洞の備える政治・教育のイデオロギーと齟齬をきたすこととなる。清末国粹派の学術の内実は江浙・嶺南の考証学伝統に基づいており、イデオロギーとしては日本の明治中期における「国粹保存運動」に直接的な恩恵を受けている。³⁴ この二つは、いずれも張之洞が学校制度を整備したときに提唱した「国文」、「国学」と、近い学術背景を有している。しかし、「国粹」の「国」の解釈において、張之洞と章炳麟ら海外の国粹論者の間には、決定的な分岐点があった。そこで直面した問題も日本の「国粹保存運動」の経験を超えたところにある。まさに狩野直喜が辛亥革命前夜に指摘した通りである。

我国（原注：日本を指す）の国粹は必ず帝室と關係を有して居る。学問技芸、其他あらゆる文化は一として間接直接に帝室の栽培護持をうけぬものはあるまい。支那の場合は之と違つて、支那の国粹は支那人が古昔からもつて居たもので現朝は異人種で支那人を征服しながら却て支那の文明に征服されて其恩恵に浴した訳である。自国の国粹を貴んだといつて、それが直ちに尊王心と結びつく訳にはいかぬ、右国粹の貴ぶべきを知つたら却つてこれを生じた支那民族の偉大なることを自覚し、愈々彼等の所謂民族主義を鼓吹するに至るかも知れぬ。前に述べた通り政府では国粹を主張し之によつて朝廷に対する忠義心を養成せんとして居るが、これは出来るかどうか分らぬのである。³⁵

光緒二十九年十一月（1904年1月）の「奏定学堂章程」、および光緒三十二年（1906）の「教育宗旨」を代表として、張之洞、嚴修ら体制内の教育指導者は、「愛国」と「忠君」を折衷し、日本の明治期における儒教倫理改造を輸入することで、近代国家アイデンティティを確立させようとした。しかしこれと同時に、やはり清朝固有の満漢問題にも対処しなくてはならなかったのである。清末において、一口に「国粹」を語るとはいつても、それは儒教道徳を守ろうとする姿勢の発露であったかもしれない一方で、むしろ革命情緒の表現であった可能性も大いにあった。かつて章炳麟からは学問と関係ないとされた「異なる立場（戎夏異途）」は、最終的には張之洞一派と国粹派との交流を阻む

34 鄭師渠「国粹派及国粹思潮出現的歴史原因」、『晚清国粹派——文化思想研究』（北京師範大学出版社、2000、第二版）、25-54頁、参照。

35 狩野直喜「支那近世の国粹主義」（前掲）参照。文中の「支那民族」は漢族、「支那人」は漢人を指し、満人を含めた中国人全体の呼び方ではない。

障壁となってしまったのである。

訳 注

- 〈1〉文中の年月は元号と旧暦を漢数字で表す。必要に応じて対応する西暦の年月をアラビア数字で用いる。
- 〈2〉著者の補足によると、国学という言葉は実際は張之洞によるものではなく、章炳麟が後に追加した可能性もある。1898年前後において、日本に由来する「国学」の概念はまだ普及していなかった。

Keywords : 章炳麟 張之洞 国粹主義

